

浜林正夫
篠塚信義
鈴木 亮

編訳『原典イギリス経済史』

井 上 巽

(1)

1960年、従来の西洋経済史学の集大成であるところの「西洋経済史講座」(岩波書店)と「社会経済史大系」(弘文堂)があいついで出版され、特にそこに収められている封建制から資本主義への移行期に関する研究が、研究者層の厚さとその内容の精密さにおいて比類なく高度な学問的水準を誇っていたことは未だ記憶に新しいところであろう。それは、いわゆる「寄生地主制論争」や「マニユファクチュア論争」等によって代表されるところの戦後日本における西洋経済史研究の1つの到達点を示す記念碑ともいえるものであった。だが、それにもかかわらず、この2つの講座のなかに、現段階における世界と日本の情勢に厳しく対応する何らかの新しい価値観と問題意識にささえられた学問研究への展望を求めようとするとき、そこに存在する1つの断絶的ないし自己完結的な様相は覆うべくもないというべきであろう。このことは、今まで多くの論者によってしばしば指摘され、現在の世界と日本の情勢が要請する新しい研究方向の確立が叫ばれて来たことは周知のところである。特に最近の西洋経済史学界が当面している誰の目にも明らかなほどの混迷状態、そうした客観的事実がわれわれにますます強くその認識をせまりつつあるように思われるのである。しかしながら、同時にまた、こうした学界の現状のなかで、これまでのカオス的な状態からの脱却を求めて各々の研究者の間で真剣な努力がはらわれつつあり、その結果としていくつかの注目すべき成果が生れつつあることも指摘されなければならないであろう。もっともこのような成果ないしは新しい研究方向への志向は未だ極く部分的なもの

であって、ましてやそれが1つの決定的な潮流を形成するに到っているとはいいがたいが、そうしたなかで最近の最も注目すべきものは産業革命史に関する研究であるといつて略誤りはないと思われる。1962年春の歴史学研究会大会近代史部会において産業革命史の研究テーマがとりあげられて以来、このテーマは多くの学術研究大会で検討され、最近その研究成果の一部がようやく発表され始つた。高橋幸八郎編『産業革命の研究』（岩波書店）がその最も重要な成果であることは周知のとおりである。

ところで、ここで批評しようとする『原典イギリス経済史』が「とくに学生諸君やイギリス経済史研究に入ろうとする人々」を対象とした教科書ないしは参考書としての性格をもつものである以上、それが従来のイギリス経済史の研究成果を最大公約数的観点から史料的に整理・統一したものであって、先に述べて来た如き学会の現状に対する編訳者諸氏の積極的な主張ないしは提言を主要な目的とするものでないことはいうまでもないことである。しかし、そうした本書のもつ性格にもかかわらず、その編別構成と史料の選択・排列を少しく検討してみると、イギリス経済史研究に対する編訳者諸氏の一定の積極的な意欲をそこに読みとることはあながち評者の独善的見解とはいえないであろう。それは、例えば従来の西洋経済史に関する教科書ないしは概説書では全くふれられないか、または著しく不十分にしか論及されて来なかつた産業革命に関する問題が先述のような学界の新しい傾向をとり入れつつ、第4章においてイギリス産業革命史の諸史料がかなり豊富にしかも独自の構成と排列とによって提出されていることのなかにも現われているといえよう。以下、私は最近のイギリス産業革命史研究をも含めたイギリス経済史研究の成果を座標軸としながら、本書に対する極く大把みな感想をまじえつつ若干の問題点を指摘してみたいと思う。その際に、内在的な批評としては本書のうちの後半の部分、殊に第4章、産業革命に関する批評が中心にならざるを得なかつたことをおことわりしておきたい。これは主として私自身の専門分野との関係上やむを得なかつたのであるが、同時にま

た、先にも述べたようにこの問題が現在、西洋経済史学界の1つの焦点となりつつあるという動向からみて、あながち無意味ではあるまいと考えたからに他ならない。

(2)

はしがきのなかでも述べられているように、本書は「アングロ・サクソン時代から19世紀」すなわちイギリスにおける封建制の成立期から産業革命期に到る期間の基本的史料を、イギリス経済史学がこれまで達成して来た主要な諸論点に即しつつ編別に構成し排列したものであって、史料数にして約100種にもおよんでいる。こうした広範囲にわたる史料を各々の訳語に厳密なる検討を加えられつつ翻訳にあたられた編訳者諸氏のなみなみならぬ努力に対してまず初めに敬意を表しておきたい。

ところで、本書が史料集であって、イギリス経済史に関する各々の論点をもっぱら史料自体とその排列によって語らしめようとするものであり、その史料に関する解説は最少限にとどめていることから、各論点に対する編訳者諸氏の積極的な見解を読みとることは必ずしも容易ではない。しかし、誤謬を恐れずにまず第2章及び第3章を中心として簡単な感想を述べさせてもらうならば、こうである。すなわち、全体として第1章封建制から第4章産業革命に到る各章における史料の選択及び排列のあり方のなかで、最も系統的で重厚さを感じせしめるのはなんといっても封建制から資本主義への移行期に関するものであろう。なかでも、この移行期の農業・土地問題に関する諸史料は各章にわたって系統的に追求されており、いわゆる「寄生地主制論争」以来のイギリス経済史学の研究成果が、特に編訳者である浜林・篠塚両氏のこれまでの研究成果を中心としてふんだんに組み込まれている。すなわち、第1章第1節マナの成立と構造、第3節国王と領主において封建制の経済的基礎としての封建的土地所有に関する諸史料があげられ、同じく第4節封建的危機と金納化に関する諸史料によって封建制の構造的危機と絶対主義

への再編成を展望せしめ、次に第2章第1節農民層分解においては、イギリス絶対王制下における農民層分解の具体的形態が農民の保有地規模と経営規模の分化を示す2つの史料を中心として（もし評者として誤解なければ）基本的には近代的＝ブルジョア的分解への指向を有するものとして提示されている。続いて第3章第3節における革命期の農業・土地問題に関する諸史料では、いわゆるイギリス市民革命の独自の農業・土地問題解決のあり方、浜林氏の旧著書の表現を借りれば「早熟性と妥協性」が慎重な配慮のもとに明示されるとともに、最後に当時の農業改良の主張に関する史料によって、第4章第1節農業革命における農業資本主義の成立への展望をあたえるという構成となっている。そこには、篠塚氏の鋭い研究分析と浜林氏の豊富な研究歴とのみごとな調和が看取されるのであって、不勉強な評者の批評能力を越えるものである。ただここであえて一言述べさしてもらおうとすれば、先述した如き絶対王制下の農民層分解の形態が、あるいは総じて第2・3章に提示されている農業・土地問題に関する諸史料が、第4章の農業革命とともに成立する近代的土地所有＝3分割制に対して如何なる展望を示し得るか、しばしば論議されて来た問題であるにもかかわらず、評者は依然としてその解答をそこに見出すことが出来なかった。

次に同じく移行期における trade の問題、すなわち工業と重商主義に関する諸史料に移ろう。ここでまず全体としていい得ることは、市民革命と重商主義をとりあつかう第3章が主として浜林氏のすぐれた研究成果を前提としつつ、明解な構成と適確な史料の選択・排列を示していることである。実際、前章における初期独占に関するものをも含めた反独占闘争関係諸史料の選択・排列の適確さと、重商主義に関連する史料のむだのない選択には実に周到な配慮が感じられるのである。しかしこうした慎重な配慮にもかかわらず、ここで指摘されねばならない問題点は、この「固有の重商主義」期において国民的産業と呼ばれたところの毛織物工業に関する史料が、逆に綿業にその主導的地位をゆずることとなる産業革命期の史料として第4章に排列さ

れていることであろう。この点は、後に述べる産業革命関係の史料選択とも関連して1つの問題点であると考えられる。さらにこうした点をも含めて、「寄生地主制論争」とともにイギリス経済史学の研究成果の重要な一翼を構成するいわゆる「マニュファクチュア論争」が第3章のうちに史料的に反映されていないことを感ずるのは評者のみであろうか。

(3)

さて、次に産業革命をとりあつかった第4章に移ろう。先にも述べたように、産業革命史の研究は現在その成果の一部がようやく発表され始めた段階であって、先の移行期に関するが如き豊富な研究史と研究成果をこの分野で期待することは出来ない。従って本書においても第4章の構成と史料の選択・排列には編訳者諸氏が特に心をくだかれたと思われるのであって、そしてそれ故に、本章は評者にとって最も興味深かったし、同時に多くの問題点、疑問点が含まれているように思われるのである。まず、本章の構成を簡単に説明するならば次の通りである。第1節では、産業革命の前提であるとともにその一環を構成するところの農業革命に関する諸史料が、次いで第2節では産業革命期における諸産業の量的・質的發展を示す諸史料が提示されている。そして以上の如き基礎過程における発展—変革を前提した上で、第3節においては、(1)地主に対する資本家の階級的勝利の過程が史料的に追求され、(2)同時に以上の過程と時期的に略平行して展開される産業革命期の労働運動の諸特徴を示す史料が豊富に提出されている。ところで、以上のような本章の構成のなかで、排列されている史料の豊富さからみて、特に力点がおかれているのは第3節の労働運動に関する問題であると考えて略誤りないと思われるが、産業革命の歴史像を描く上において、こうした基本的な観点に対して賛意を感ずる。いうまでもなく、近代資本主義社会の確立画期たる産業革命の最大の歴史的意義は、資本家階級に対するプロレタリアートの階級的結集と敵対との全面的展開、これであって、この点は最近の経済成長理

論にもとづく産業革命史研究が意識的に無視せんとする論点であるが故に、同時にまた産業革命の個別実証的研究がややもすれば全機構的把握を欠如しがちな傾向をもつが故に絶えず強調されなければならないであろうと思われる。

さて、以上のような基本線を確認した上で、私は特に第2節と第3節に焦点を合せつつ、そこに提示されている史料の選択と排列のあり方に関して若干の感想を述べてみたいと思う。まず、第2節産業の発展に関して最初に指摘したい問題は、イギリス産業革命の主導産業である綿業、特に綿紡績業の地位が史料的に必ずしも明確でないことである。すなわち、これをもう少しときほぐして述べるならばこうである。いうまでもなく、古典的形態をもつイギリス産業革命の主導的産業は衣料生産部門、特に綿業であるが、その場合、綿業3分化工程のうちでの主導部門は紡績業であって、織布工程における生産回転はこの紡績業の生産回転を前提としそれに主導されつつ展開するという関係にあること。従って、ここで綿業に関する史料を唯一つ選択するとすれば、紡績業に関する史料こそが選ばれるべきであって、本節でとりあげられている力織機の導入に関する史料のみでは、著しく不充分であるという批判は避けられないのではあるまいか。（この他に、産業革命前後の主要経済指標 ii において綿業に関する統計表があげられており、史料としてはこちらの方がより重要な論点を含んでいると考えられるが、この場合も紡績業の発展を直接的に説明する史料とはいいがたい。）第2の問題は、本節の最初に排列されているところのウェスト・ライディングの毛織物工業に関する史料についてである。先にもふれたように、この史料は時代的にも（1724～6年）明らかにマニェ段階に属するものであって、「固有の重商主義」期における国民的産業を示すものとしてむしろ前章のなかに組み入れられるべきではなかったろうか。仮りに産業革命期における毛織物工業の発展を明らかにする史料を選ぶとすれば、例えば1806年の「紡毛工業調査委員会報告」がより適切な史料であるように思われる。第2節については以上のような衣

料生産部門の他にも生産手段生産部門関係の史料に関する問題もあると思われるが、あたえられた紙数も残り少なくなったので割愛したい。

次に第3節では、先に述べたように、大きくは穀物法問題をめぐる地主と産業資本の階級的対抗に関する史料と産業革命期の労働運動に関する史料の2つの群に分けることが出来る。まず、前者については、その歴史的意義の重要性に比して提出されている史料の絶対数が著しく少いことである。(選挙法改正関係の史料を含めてわずかに2種!/)この点に関連して評者の意見を若干付け加えさせていただくならばこうである。すなわち、この穀物法問題が地主と産業資本の敵対をその内に含みつつ、全体としてはイギリス自由貿易政策の確立過程に関連し、その後の自由主義段階におけるいわゆる「世界の工場」イギリスを中心とした古典的世界経済体制の形成へとつながって行く関係にあること、この点が史料的に追求されないとすれば、イギリス産業革命の歴史像としては不充分さをまぬがれ得ないであろうし、しかも以上の如き関係がその後の展望として、広大な植民地所有と独占利潤にもとづく「イギリス労働運動における日和見主義の(一時的)勝利」(レーニン)と関連しているとすれば、次に述べようとする労働運動関係諸史料とも関連して、イギリス資本主義の歴史的特質に何ほどかの接近が試みられ得たのではあるまいか。

最後に労働運動に関する諸史料の選択・排列について簡単な感想を述べて本書の批評を終ることにしたい。本節の史料解説でも強調されているように、この期における労働運動には未だ小生産者的性格が強く残存しているのであるが、そうした中でも小生産者層の運動と工場プロレタリアートの運動は論理的に明確に区別されなければならないことはあらためて述べるまでもあるまい。しかもこのような全体として小生産者的性格の強いこの期の労働運動の中から、厳密な意味での工場プロレタリアートの運動を抽出することは、その後の労働運動に対する展望をあたえるものとしてきわめて重要な意義があると考えられるのである。勿論、本書においても、そうした点が史料

的に全く無視されているわけではないが、しかし、例えば相対的過剰人口に関連すると思われる貧民法関係史料の過剰ともいえる豊富さ（5種類）に比して、厳密な意味で工場プロレタリアートに関係する史料はわずかに児童労働に関連する2つの工場法のみであって、基幹的労働力たる成年男子工場労働者の運動に直接論及する史料は絶無である点、史料選択の理論的基準自体について疑問を感じないわけにはいかない。少なくとも1834年のオーエンの Grand National に関する史料やランカシャー紡績工組合関係の史料などは、近代工場プロレタリアート運動の本格的開始を示すものとして不可欠なものではあるまいか。ともかく、全体として、ここに提出されている史料が非常に豊富で、特に労働運動の小生産者的性格が多面的な史料によって追求されていることには敬服するが、しかし先に述べたような問題は依然として本節の重大な弱点であることを指摘しないわけにはいかないであろう。

以上、主として産業革命に関する問題点を中心として本書に対する感想を述べさせてもらったが、私自身の不勉強による思わぬ誤読・誤解やそこから来るまとはずれな批評があることを恐れている。そして多くは単なる超越的な批評に終わったことを、編訳者諸氏の御海容を得たい。